

はじめに

スペイン語（イスパニア語）の動詞は、叙法（ムード、英語で mood, スペイン語で modo）と呼ばれる体系を持つ。叙法はモダリティ（英語で modality, スペイン語で modalidad）を表す上で重要な働きをする。スペイン語の叙法については、これまでに膨大な研究の蓄積があるが、本書では、第1に、日本語学のモダリティの研究成果を援用することで、また第2に、電子コーパスから得られる資料やインフォーマント調査を活用することで、問題の解明にいささかなりとも新たな貢献をしようと試みる。

本書は、筆者がこれまでに発表した研究論文などをもとに、スペイン語のムードとモダリティについての現時点での考えを示したものである。章によって用いた言語資料の種類と収集時期が異なる場合があるが、言うまでもなく、議論そのものは単一の基軸で貫かれている。

要した時間に比してささやかな成果ではあるが、本書の実現に至るまで、実に多くの方々のお世話になった。このテーマを筆者に勧め、修士論文を指導してくださった大阪外国語大学 元学長 山田善郎先生、本書の基礎となる博士論文の指導をくださった Universidad Complutense de Madrid 元教授 Ignacio Bosque Muñoz 先生、日本語学への道案内をくださった畏友 神戸市外国語大学名誉教授・関西外国語大学教授 益岡隆志氏をはじめ、国内外の多くの研究者、友人、学生の皆さんとの出会いがなければ、このような形ですら研究成果を世に問うことはできなかっただろう。

本書の刊行に際し、スペイン文化省よりグラシアン基金 (Programa “Baltasar Gracián”) の助成をいただいた。心から感謝するとともに、刊行まで大変な時間がかかってしまったことを深くお詫び申し上げる。

また、くろしお出版（編集部 池上達昭氏、荻原典子氏）には、この出版企画を受け入れてくださったこと、実現まで辛抱強く待ち、励ましてくださったことに対し、感謝と申し訳なさ以外の言葉が見当たらない。

2018年9月
福嶋教隆

目次

	はじめに.....	i
	凡 例.....	vii
第1章	序 論.....	1
1.1	本書の目的と構成.....	1
1.2	直説法と接続法.....	2
第2章	叙法の機能に関する従来の諸説.....	7
2.1	統語面からの規定.....	7
2.2	意味面からの規定.....	12
2.2.1	「現実」対「非現実」.....	12
2.2.2	「現実」対「願望, 疑惑」.....	13
2.2.3	「客観性」対「主観性」.....	13
2.2.4	「断定」対「断定保留」.....	14
2.2.5	「主張」対「無主張」.....	14
2.2.6	「主たる情報」対「副次的情報」.....	15
2.2.7	その他.....	16
2.3	一元論・二元論・多元論, 有標・無標.....	17
2.4	まとめ.....	18
第3章	スペイン語と日本語のモダリティ.....	21
3.1	スペイン語のモダリティ.....	21
3.2	日本語のモダリティ.....	22
3.3	スペイン語と日本語のモダリティの対照研究.....	25

第4章 叙法の機能に関する新たな提案	29
4.1 提案.....	29
4.2 提案(表5)と第2, 3章との関係.....	35
4.3 提案(表5)と基本的事例.....	36
4.3.1 独立文.....	37
4.3.2 名詞節, 名詞修飾節.....	40
4.3.3 関係節.....	41
4.3.4 副詞節.....	42
4.3.5 条件節.....	43
第5章 名詞節Ⅰ(要素の付加, 移動)	45
5.1 要素の付加.....	45
5.2 要素の移動.....	49
第6章 名詞節Ⅱ(多重従属)	53
6.1 一般的な多重従属.....	53
6.2 非局所的支配による多重従属.....	54
第7章 名詞節Ⅲ(感情節)	59
7.1 序論.....	59
7.2 映画のシナリオを資料体として.....	60
7.3 電子コーパスを資料体として.....	63
7.4 感情節と情報の焦点.....	65
第8章 名詞節Ⅳ(思考節, 虚偽節)	71
8.1 思考節(否定命令文, 修辞疑問文の場合).....	71
8.2 思考節(無標の疑問文の場合).....	74
8.3 虚偽節.....	78

凡 例

〈語釈略記〉

直：直説法	過分：過去分詞
接：接続法	1～3：1～3人称
現：現在形	単：単数
過：過去形	複：複数
点：点過去形(単純過去形)	再帰：再帰代名詞
線：線過去形(不完了過去形)	接続：接続詞
未：未来形	関：関係詞
過未：過去未来形	定：定冠詞
現完：現在完了形	不定：不定冠詞
不：不定詞	否：否定辞
現分：現在分詞	

〈例文中の叙法識別〉

ボールド体の文字：直説法
 ボールド・イタリック体の文字：接続法

〈表の一覧〉

- (表 1) スペイン語の動詞の諸形態
- (表 2) 叙法の意味的働きに関する諸説
- (表 3) 叙法の働きを考えるうえでの留意点
- (表 4) 叙法の分析にモダリティ、日本語との対照研究を関係づけるうえでの留意点
- (表 5) 提案：スペイン語の叙法の機能分担規則
- (表 6) 接続法を導く叙法導入辞の例
- (表 7) 直説法を導く叙法導入辞の例
- (表 8) 資料体とした映画のシナリオ
- (表 9) (表 8)の資料に見られる感情節の事例(叙法導入辞で記す)
- (表 10) CREA の alegrarse の事例
- (表 11) 感情節の基本構文・疑似分裂文の事例数
- (表 12) creer を主動詞とする疑問文と叙法
- (表 13) el hecho 節の叙法選択に関する諸説

- (表 14) el hecho 節の叙法選択規則
- (表 15) el hecho 節を用いた文の容認度(スペイン)
- (表 16) el hecho 節を用いた文の容認度(ラテンアメリカ)
- (表 17) el hecho 節を含む平叙文・部分疑問文の叙法
- (表 18) 事実を表す aunque 節に接続法が用いられる用法に関する諸説
- (表 19) aunque 節の叙法選択規則
- (表 20) 上田・編(1984–1997)中の aunque の使用内訳
- (表 21) 上田・編(1984–1997)中の aunque 節の意味内容
- (表 22) aunque 節を用いた文の容認度(スペイン)
- (表 23) aunque 節を用いた文の容認度(ラテンアメリカ)
- (表 24) de ahí que 節の叙法選択規則
- (表 25) CREA における de ahí que 節の使用状況
- (表 26) CREA における「de ahí + 推測・結果の動詞 + que」の使用状況
- (表 27) CREA における「de ahí + el・el hecho de + que」の使用状況

第 1 章

序 論

1.1 本書の目的と構成

スペイン語（イスパニア語）は、ラテン語（厳密には俗ラテン語）から派生したロマンス諸語の1つで、スペイン、ラテンアメリカ諸国などで4億を超える人々によって用いられている。その特徴の1つは、動詞が豊かな屈折体系を持つことにある。一般に、各々の動詞は次のような形態を持つ（現代語では使用がまれな形態は省く）。

（表 1）スペイン語の動詞の諸形態

定形：	1. 直説法…単純形… 現在形，点過去形（単純過去形），線過去形（不完了過去形），未来形，過去未来形 複合形… 現在完了形，過去完了形，未来完了形，過去未来完了形
	2. 接続法…単純形… 現在形，過去形（ra 形），過去形（se 形） 複合形… 現在完了形，過去完了形（ra 形），過去完了形（se 形） ¹
	3. 命令法
非定形：	1. 不定詞…単純形，複合形
	2. 現在分詞…単純形，複合形
	3. 過去分詞…男性単数形，男性複数形，女性単数形，女性複数形

¹ 接続法過去形，過去完了形には，ra 形・se 形という2つの形態がある。その機能分担については，福嶋（2015c, 2017）を参照。

第2章

叙法の機能に関する従来の諸説

2.1 統語面からの規定

直説法と接続法の使い分けの原理や、接続法の機能については、非常に多くの研究がなされてきた⁴。本章では、その主なものを概観しよう⁵。

第1に、両叙法の特徴を統語面から捉えようとするのか、意味機能や情報構造で規定しようとするのかで立場が分かれる。以下では、前者を「統語面からの規定」、後者を「意味面からの規定」と呼ぶ。

第2に、叙法の諸用法を1つの原理に収束させようとするか、それとも相容れない複数の機能が単一の形態に託されていると考えるかという観点の違いが認められる。以下では、前者の立場を一元論、後者の立場を多元論と呼ぶことにする。

まず、統語的側面から叙法、特に接続法を規定しようとする見地がある⁶。ラテン語文法の伝統に端を発する捉え方であり、最古のスペイン語文法書で

⁴ 学説史については Navas Ruiz (1986: 115–154, 1990), Zamorano Aguilar (2001, 2005), Bosque (1990, 2012), Busch (2017) などの研究がある。

⁵ 詳しくは福嶋 (1976, 1977a, 1986, 2006, 2010, 2011a, 2011b, 2018b) を参照。

⁶ 一方、直説法は、意味的側面から捉えられることが多い。Nebrija (1492: III, 10, Nebrija, 中岡・訳 1996: 109) は「今行われていることを明示するための叙法」、RAE (Real Academia Española, スペイン王立学士院) (1771: 61, 福嶋 2011b: 8) は「事柄を単純に指示または表明する」叙法としている。

第3章

スペイン語と日本語のモダリティ

3.1 スペイン語のモダリティ¹²

本章では、日本語学において高度に発達を遂げたモダリティ研究の成果を援用することができないか、考えてみたい。そのため、モダリティという概念がスペイン語学と日本語学でどのように捉えられてきたかを、まず考察し、さらに、両言語のモダリティの対照研究の成果を振り返る。

スペイン語学でモダリティの概念に最も早く言及した研究書の1つはRAE (1973)であろう。同書では、Bally (1932)の学説に基づき、文を「表現される内容」と「それを話し手の心的態度との関係でいかに表すか」という部分に分け、前者を「事理(dictum)」、後者を「様態(modus)」と呼ぶ(RAE 1973: 454)。この「様態」には、モダリティの概念と近似する部分がある¹³。

その後、Otaola (1988), Jiménez Juliá (1989), Iguada (1990)が「モダリティ(modalidad)」について論じた。これらは共通して、文や節が表す事柄をモダリティが包み込むという見地を是とし、モダリティを発話行為に関するもの(平叙、疑問、命令)と、発話内容に関するもの(Otaola(1988)は論理、

¹² 第3.1～3.2節は、福罵(1991, 2013b, 2014)に基づいている。

¹³ ただしBallyは「様態」を、たとえば「主語+『信じる、喜ぶ、願う』などの動詞」の総体と見なしており、後述する国語学の「陳述」や日本語学の「モダリティ」とは必ずしも一致しない(Bally 1932/小林・訳 1970: 28)。

第4章

叙法の機能に関する新たな提案

4.1 提案

以上の議論を踏まえ、スペイン語の叙法の機能を少しでも一層正確に捉える説明方法はないかを考えた結果、次のような提案をしてみたい。

(表5) 提案：スペイン語の叙法の機能分担規則

- | |
|---|
| <p>a. 「事実だと断定し、聞き手にむけて主張する」働きをする動詞は、<u>発話レベルにおいて無標の叙法である直説法</u>で表される。</p> <p>b. 「願望」「疑惑」「前提事実」などを表し、「事実だという断定・主張をしない」働きをする叙法導入辞に導かれる動詞は、<u>発話レベルにおいて有標の叙法である接続法</u>で表される。</p> <p>c. 上記 a, b の下線部は、主に現代スペインのスペイン語で有効である。</p> |
|---|

以下、この提案について説明する。まず、提案(表5a)を見る。「『事実だと断定し、聞き手にむけて主張する』働きをする動詞は、発話レベルにおいて無標の叙法である直説法で表される」において、「断定」とは、話し手、または主語に立つ者が、動詞によって表されるある事柄に対して下す判断を指す。すなわち、「事実だと断定する」とは、動詞によって表されるある事柄が、過去・現在・未来のいずれかにおいて現実に生起した、または生起すると判断することを言う。

第5章

名詞節 I (要素の付加, 移動)¹⁹

5.1 要素の付加

この章では、本書の提案(表5)を裏付ける言語現象を名詞節に求めてみよう。名詞節をとる複文に、要素の付加や移動といった操作を加えて、文法性に変化が起きるかテストをすることによって、提案(表5)の妥当性を示すことができる。以下では、かつて筆者がスペイン語母語話者を対象に実施し、福畠(1981, 2000b)で報告した調査結果の一部を利用する。

まず以下の6つの複文を用意する。(33a, b, c)の主要部 *creer* (思う), *decir* (言う), *darse cuenta* (気づく)は直説法を導く叙法導入辞であり、それぞれ(表7)のa, b, cに該当する。(33d, e, f)の主要部 *interesar* (関心を抱かせる), *dudar* (疑う), *querer* (欲する)は接続法を導く叙法導入辞であり、それぞれ(表6)のc, b, aに該当する。従属節は「これから対舞が始まる」という同一の内容を表している。従属動詞は(33a, b, c)では直説法, (33d, e, f)では接続法になっている。

(33) a. *Creo* *que van a* *bailar la contradanza.*

思う(直現1単) 接続 ~するだろう(直現3複) 踊る(不) 定 対舞

¹⁹ この章は福畠(2018a: 645–647)に基づいている。

第6章

名詞節Ⅱ（多重従属）

6.1 一般的な多重従属²⁴

前の章で論じたのは、或る操作を文に加えた場合に生じる結果が本書の提案に合致するか否かという問題であったが、次は一定の文タイプで行われる叙法選択を提案が的確に説明できるかどうか、という観点から、本書の提案（表5）の妥当性を検証する。取り扱うのは、名詞節の中に、さらに名詞節が存在する、多重従属の複文である。

一般に、従属動詞の叙法の導入辞となるのは、その節を直接支配する主要素である。たとえば(37a)では、*asegurar*（請け合う）という動詞が、その直接の従属動詞 *ser*（～である）を直説法の形 *es* にし、*es mejor*（～のほうがいい）という主要素が、その下位の節にある *pensar*（考える）を接続法 *piense* にし、*pensar* は、さらに下位の節の動詞 *ir*（行く；～しようとする）の叙法導入辞として働き、*voy* という直説法の形にしている。つまり(37b)に示すように、叙法の決定は直接の支配・従属関係にある要素間で局所的に行われ、多重の従属節がある文では、それが順次、連鎖を成している。以下では多重従属の文の最上位の節を「節1」、その直接の従属節または動詞句を「節2」、その直接の従属節を「節3」のように呼ぶことにする。

²⁴ この節は、福罵(1984, 1990a, 1990b, 2000b, 2001b, 2018)がもとになっている。

第7章

名詞節Ⅲ（感情節）²⁷

7.1 序論

この章および第8～11章では、接続法が実際に起こったこと、起こっていることを表す事例を取り上げ、それを本書の提案(表5)がどのように説明するかを考察する。まず、感情節に注目しよう。感情節とは、alegrarse (喜ぶ), sorprender (驚かせる), bueno (良い), triste (悲しい), contento (満足な), maravilla (すばらしさ), lástima (残念) など感情、主観的判断を表す語・語句を叙法導入辞とする名詞節を指す。この用法は、主節と名詞節から成る、典型的な複文だけでなく、主動詞を欠く主部が名詞節を従える構文でもよく用いられるので、これを「半名詞節」と呼んで、名詞節とともに本章の考察対象に含めることにする²⁸。

感情節では、第2.2.5項などで述べたとおり、事実を表す場合にも接続法が用いられるため、特に「接続法は非現実を表す」とする説にとって反例となり、従来より研究教育者の関心を集めてきた。

本書の提案を検証するに当たり、3つの資料体を利用する。第1は、スペインの現代の一般市民が使う口語を反映した素材として、最近スペインで制

²⁷ 本章は福罵(1978, 1992, 2007)の議論を発展させたものである。

²⁸ すぐあとに出る例文(41c)が半名詞節の例である。

第 8 章

名詞節Ⅳ（思考節，虚偽節）³⁴

8.1 思考節（否定命令文，修辭疑問文の場合）

この章では、名詞節中の叙法選択の中に、一見、本書の提案にとって不都合かと思える現象を取り上げる。そして、実はそれが逆に提案を支持するものであることを示す。第 1 に扱うのは、*creer*（思う）、*pensar*（考える）、*parecer*（思われる）などを主動詞とする従属節である。本書では、これらの動詞を「思考動詞」、それらが従える名詞節を「思考節」と呼ぶことにする。第 2 の対象は、 *fingir*（～のふりをする）、*mentir*（～とうそをつく）などを主動詞とする従属節である。これらの動詞を「虚偽動詞」、それらが従える名詞節を「虚偽節」と呼ぼう。

思考節では、すでに第 1 章で例文 (2a) を用いて述べたように、現代スペイン語では主節が肯定形の場合、直説法が選ばれる。また、第 4.1 節で例文 (21) を用いて示したとおり、これに関しては確信の度合の強弱を問わない。

主節が否定形の場合、思考者が 1 人称以外なら、直説法も接続法も許されることを、第 4.3 節で見た³⁵。次の例では (49b) が一般的だが、(49a) も可能

³⁴ この章は福畠 (2011c, 2013a: 第 4 章, 2015b) に基づいている。

³⁵ 思考者が 1 人称の場合、思考者と話し手が同一なので、従属動詞は接続法が選ばれるのが基本である。ただし、直説法を用いた例も存在しないわけではない。RAE & ASALE (2009: I, 1910) はこれを「論理的に矛盾するのだが」と評している。

第9章

名詞修飾節³⁸

9.1 el hecho 節

この章では、el hecho de que (～ということ) という形で始まる節の中の叙法を考察対象とする。以下ではこれを el hecho 節と呼ぶことにする。el hecho 節では、前置詞 de および接続詞 que を介して名詞 hecho を修飾する働きをする。節の内容が hecho と同格であるから、同格節ということもできる。hecho は「こと、事実」という意味であるから、通常の見方では、従属節には直説法を用いるのが自然なように思われるが、実際には、内容が明らかに現実を表す場合でも、しばしば接続法が用いられる。

- (58) a. Noboru abrió un libro de texto y
 登 開ける(直点3単) 不定 教科書 そして
 hojeó unas páginas, pero no
 ページをめくる(直点3単) いくつかの ページ しかし 否
 podía concentrarse. Le molestaba
 ～できる(直線3単) 集中する(不) 彼を 悩ます(直線3単)

³⁸ この章は福罵(1990c, 2002b, 2008, 2015b)に基づいている。

第10章

副詞節 I (讓歩節)⁴⁵

10.1 aunque 節

この章と次の章では、本書の提案が副詞節における叙法の働きをどのように対処できるかを考察する。まずこの章では、讓歩を表す副詞節(以下、「讓歩節」と呼ぶ)の1つである *aunque* (～にもかかわらず; たとえ～でも) という接続詞が導く讓歩の副詞節の中の叙法を取り上げる。以下では、この副詞節を *aunque* 節と呼ぶことにする。

かつては *aunque* 節の中の叙法の対立は、「直説法は事実を表し、接続法は仮定を表す」として説明されてきた。

- (66) *Aunque* {a. *hace* / b. *haga*} *mal tiempo, saldré.*
 ～でも 天候が～である(直現3単) / (接現3単) 悪い 天気 出かける(直未1単)
 ({a. 天気が悪いが / b. たとえ天気が悪かろうと} 私は外出するつもりだ。)
 (Gili Gaya 1943 / 1951: §249)

たとえば Gili Gaya (1943/1951: §249) は、上記の例を挙げて、直説法が用いられた(66a)では「主節の内容の実現にとっての困難さが実在することが

⁴⁵ この章は福罵(1998, 2004)に基づいている。

第 11 章

副詞節Ⅱ (結果節)⁴⁹

11.1 de ahí que 節

スペイン語には、de aquí que (これゆえに～)、de ahí que (それゆえに～)、de allí que (あれゆえに～)、de donde que (そこゆえに～) という語句に導かれる節・文形式がある。あとに見るように、この中では de ahí que が最も使用頻度が高い。これらは、たとえば *A, de ahí que B.* または *A. De ahí que B.* のように、主述構造 *A* と *B* の間に介在する位置で用いられ、「*A* という原因ゆえに *B* という結果が生じる」ことを表す。*A. De ahí que B.* の場合、*De ahí que B.* は文であるが、従属節を導く接続詞 *que* を必要とすることから、従属節に近い性質を持っていると言える。

そこで本書では、これらの形式を「de ahí que 節」と総称し、個別に指し示す必要があるときは、それぞれ「*aquí* 節」、*「ahí* 節」、*「allí* 節」、*「donde* 節」と呼ぶことにする。また、これらのように、できごとの結果を表す節を「結果節」と呼ぶことにする。

結果節を導く句には他に *luego, así que, conque* (いずれも「それゆえに～」) などがあり、またできごとの結果を表す句には *por eso, por consiguiente, por tanto* (いずれも「だから～、従って～」) などがあるが、これらはすべて直説

⁴⁹ この章は福畠 (1993) を基礎に、その後の研究動向と最新の言語資料を採り入れて書き改めたものである。

第12章

結 論

12.1 本書の議論のまとめ

本書では、スペイン語の叙法（ムード）の使い分けの原理に関して、日本語のモダリティ研究の成果を援用して新たな提案を行い、さまざまな文形式についてこの提案が妥当であることを示してきた。最後に議論の流れを振り返りつつ、本書の提案を整理してみよう。

第1章「序論」では、スペイン語の叙法について概説し、「スペイン語の叙法の使い分けの原理を明らかにすること」を本書の目的に掲げた。

第2章「叙法の機能に関する従来諸説」では、これまでの諸学説を検討した結果、本書の対象を論じるには、どのような点への留意が欠かせないかを、(表3)の形で抽出した。特に(表3a)の「意味面からの規定」に関しては(表2)のような捉え方があることを明らかにした。

(表3) 叙法の働きを考えるうえでの留意点(再録)

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> a. 叙法を統語面から規定するか、意味面から規定するか。 b. 叙法はそれ自体が意味を持つか、それとも意味を担うのは別の言語要素で、叙法はそれと呼応しているに過ぎないのか。 c. 叙法の原理を一元論、二元論、多元論のいずれで捉えようとするか。 d. 両叙法の間に、有標・無標の区別を行うか。 |
|--|